

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者（ふりがな）	神崎由奈美（かんざき ゆなみ）
所属・資格（※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載）	人間科学研究科修士2年
発表年月 または事業開催年月	2025年8月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本認知・行動療法学会第51回大会
発表者（※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること）	神崎由奈美・柳田綾香・前田千晴・熊野宏昭
発表題目（※学会発表の場合のみ記載）	中高生を対象とした家族との共食とむちゃ食いの関連に関する文献レビュー
発表の概要と成果（抄録を公開しているURLがある場合、「概要・成果」を記載した上で、URLを末尾に記してください。また、抄録PDFは別途ご提出ください。なお、抄録PDFはWeb上には公開されません。）	
<p>摂食障害は、思春期・青年期女性の代表的な精神疾患の一つであり、障害に至らずとも食行動に異常をきたしている者の増加が指摘されている（島谷・椿, 2013）。むちゃ食い障害（Binge Eating Disorder：以下、BED）は、「区切られた時間の中で、同様の環境ではほとんど人が食べると思われる量よりも明らかに大量の食物を食べること」と定義されており（喜入, 2012），制御不能感を伴うが、むちゃ食い後の自己誘発性嘔吐や下剤の使用、過度な運動、断食といった不適切な代償行動が見られないことが特徴である。摂食障害の発症・維持要因について、幼少期の母子関係の問題や痩せを賞賛する社会文化的な風潮の影響などが考えられ、複数の要因が複雑に絡み合い成立していることが指摘されている（Ward et al., 2000）。そのため定期的な家族との食事（共食）は、健康的な食習慣の維持や家族間の交流を促進させ、心理社会的な発達に寄与することにより、摂食障害の予防に役立つ可能性が考えられる。共食場面でのコミュニケーションの中で、親しい家族や友人から心理的な支援を享受すると考えられている（小林・中野, 2019）。しかし、家族との食事パターン（例えば、家族との食事頻度、食卓の雰囲気）と思春期・青年期の子どもの摂食障害との関連を検討した文献は少なく、関連性の整理や研究手法の検討は行われていない。そこで本研究では18歳以下の子どもを対象に、むちゃ食いと家族との食事パターンの関連を検討した先行研究を概観するとともに、限界点について考察することとする。</p> <p>中高生の家族との食事パターンとむちゃ食いの関連において、1件は有意な関連はみられなかったが、2件の先行研究では有意な関連がみられ、食卓の雰囲気が良好であるなどのポジティブな家族との食事経験が、むちゃ食いの発症を防ぐ可能性が示唆された。ストレスの少ない環境で暮らす人は、不適切な食行動をとることが少ないと明らかとなっていることから（Langdon-Daly et al., 2017），家族との食卓の雰囲気や家族関係が良好な場合は、健康的な食行動をとりやすく、心理的な幸福感を得やすい可能性が考えられる。以上を踏まえて、食事頻度よりも家族との良好な食卓と親子関係が、むちゃ食いの予防因子として機能する可能性が考えられる。</p>	

※無断転載禁止